

## アダム・スミスの重農学派批判に関する一素描 : ケネーの学説と関連せしめて

著者	田中 充
雑誌名	関西大学経済論集
巻	11
号	3
ページ	278-302
発行年	1961-08-20
その他のタイトル	A Sketch of Adam Smith's Criticism on Physiocrats
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/15511">http://hdl.handle.net/10112/15511</a>

アダム・スミスの重農学派批判に関する一素描(田中)

七四

## アダム・スミスの重農学派批判に関する一素描

—ケネーの学説と関連せしめて—

田 中 充

### 一、序 説

いかなる偉大な学者の思想・学説といえども—ことに社会科学においては—、その学者の生存している時代・国家及び社会的情勢をその背景としないものはないであろう(歴史的背景)。また学者の思想・学説というものは彼の生存している時代を通じて一貫している思想・学説の傾向の影響を受けないではおられないものである(理論的背景)。

それではアダム・スミス(Adam Smith, 1723—1790)の思想・学説はいかなる背景のもとに樹立され、またそれが反映しているものは何であつたであろうか。

理神論者であるスミスは自然神学を社会科学の基礎として、

「神は人間の幸福を目的として世界を創造したるものなるが故に、結局人間全体の幸福を実現しうべし」、と樂觀して、<sup>(1)</sup>重商主義—経済にたいする国家の干渉—に反対し、経済的自由主義すなわち自由放任論を主張したのである。

しかしながら、かくの如き思想・学説もただスミスにおいてのみみられたのではないのである。

すなわちスミスについていうならば、一八世紀におけるものの考え方がスミスにやはり多大の影響をあたえているのである。一般的にみて、スミスの思想・学説に影響をあたえた人々の思想あるいは学説の代表的なものをあげれば、およそつぎの如くである。

第一、フランシス・ハチソン (Francis Hutcheson, 1694—

1746)。

第二、ジョウジフ・ハリス (Joseph Harris, 1702—1764)。

第三、デイヴィッド・ヒートム (David Hume, 1711—1776)。

第四、マンデヴィル (Bernard de Mandeville, 1670—1733)。

第五、トリー党に属する学者より出でたる自由貿易学説。

そして、

第六、フランソワ・ケネー (François Quesnay, 1694—1774)

によつて代表される重農学派 (Physiocrates)。<sup>(2)</sup>

スミスは以上の人々の思想あるいは学説の影響を受けており、そのため、アダム・スミスは必ずしも独創的な学者ではなく、むしろ先人の思想や学説を集大成した人である<sup>(3)</sup>とみなしうるのである。

ことに、スミスと、ケネーを創始者とするフランスにおける重農学派との関係について考察するならば、それは、第一に、重農学派の経済学説を研究する上において、また第二に、スミスの経済学説を研究する上においても有意義なものがあるであろう。

第一の問題についていうならば、スミスは、『国富論』第四編第九章、「農業主義、即ち土地の生産物を以て各国の収入及

アダム・スミスの重農学派批判に関する一素描 (田中)

び富の唯一のもしくは主たる源泉となす経済学説について」の

項において、重農学派について闡説し、これを批判したのである。この批判はスミスの誤解と不徹底とによるものであるが、

それにもかかわらずスミスの重農学派批判以来、重農学派の経済学説は過去の暗闇の中にほうむられてしまい、約一世紀のあいだ正しい研究と批判を受けることがなかつたのである。<sup>(4)</sup>

しかしながら、スミスの重農学派の学説にたいする批判的な態度が、かえつて重農学派の再認識という形をとつてあらわれて来た。したがつて、重農学派の経済学説を研究しようとするならば、重農学派の学説におけるいかなる点がスミスによつて批判され、誤解されていたかを検討することが望ましく、これによつて、真の重農学派のもつ学説上の価値を知りうると言いうるであろう。

第二の問題は、重農学派の学説がいかなる点でスミスの学説に影響をあたえているかということである。

この問題のもつ学説上の意義は重要であるが、この小論においては、主として第一の問題に重点をおき、第二の問題は単にこれを指摘するにとどめる。

この小論は、筆者が初学のため、学説研究としては全くの準備的段階の域を脱していないが故に依拠すべき研究方法及び基

アダム・スミスの重農学派批判に関する一素描(田中)

七六

調となるものが定まらず、未整理のままであつて、この点に關しては不完全な部分が非常に多いが、社会科学としての経済学の創生期における仏・英兩國の二大経済学者すなわち重農学派の始祖フランソワ・ケネーとアダム・スミスとの關係あるいはスミスの重農学派批判について、若干の素描を試みたものである。

註(1) 河合榮治郎『社会思想史研究』(社会思想研究会)

昭和二十七年、四六頁。

(2) 同上、二七一—三三頁参照。

堀経夫著『経済学史通論』(実教出版)昭和三〇

年、七七—九〇頁参照。

(3) 堀経夫著同上、七七頁。

(4) シュムペーター教授はつぎの如く述べている。

「フィジオクラフトは正しき批判に悩んだというよりもむしろ同時代の人々や後代の人々の誤解と全く皮相的な非難とに悩まざるを得なかつた。」。

(J. A. Schumpeter, "Epochen der Dogmen- und Methodengeschichte", 1914. シュムペーター著、中

山伊知郎、東畑精一訳『経済学史—学説並びに方法の

段階—八岩波書店、昭和二五年、九一頁。)

## 二、スミスと重農学派との關係

アダム・スミスとフランソワ・ケネーならびに重農学派の人々との關係は單に學問上にとどまらず、個人的な交渉をもつていた<sup>(1)</sup>といわれている。スミスはその有名な教<sup>(2)</sup>え子若きバツクル侯(Duke of Buccleugh)と共に、一七六四年三月から一七六六年十月迄の約二ケ年半、大陸を旅行し、この大陸旅行中の約十ヶ月間をパリで過している。そしてこの間にケネーとその門弟、その中でもチュルゴーと親交を結んでいる。(スミスがケネーと相識つたときは、商工業を不生産的であるとしたケネーの主張を中心にした論議が最も盛んであつた際であつたのである。——傍点筆者——)チュルゴーにはデイヴィッド・ヒュームによつて特別に紹介されたといわれている。

その頃ケネーは、ルイ十五世の愛妾であつたポンパドール侯夫人(Madame la Marquise de Pompadour)の侍從医としてヴェルサイユ宮殿の中二階に起居しており、いわゆる「中二階の会合」(Réunion de l'entresol)によつて知名の士と時局を論じ、哲学の問題や(農業)経済の問題を研究していた。

この会合の仲間には、ディドロ、ダランベル、エルヴェシウス、ビュッフォン、チュルゴの他に、彼の後年の弟子達、即ちミラボー侯、ル・メルシエ・ド・ラ・リヴィエール、デュボン・ド・ヌムールがあり、またヴァンサン・ド・グルネヤコンディヤックもいたと推測されているが、この会合にスマイスが出席していると伝えられていることから、スマイスと重農学派との間に親交があつたことを容易に知りうるのである。

また、モレーは、その著『追憶』“Memoires”（第一巻、二四四頁）の中に、「私はスマイスをそのフランス旅行中に知つていた。フランス語は随分まづいように思われたが、その『道徳情操論』(“The Theory of Moral Sentiments” by A. Smith. 1st ed. 1759.)からは、彼が明敏にして深遠だという感じを強く受けていた。実を言えば、今日でもやはり、彼の論ずるすべての問題にわたつて最も完全な観察と分析を示した人の一人であると思つてゐる。私と同様、形而上学を愛好したチュルゴ氏は、彼の才能を高く評価していた。私達はエルヴェシウスの家で彼を何度も見かけた。そこでわれわれは、貿易論・銀行論・公債論ならびに彼が構想していた大著の数多くの観点を語りあつた。……」<sup>(3)</sup>、と述べているが、このことからわれわれは

アダム・スマイスの重農学派批判に関する一素描(田中)

チュルゴとスマイスとの関係を知りうるし、また、スマイスが既に『国富論』の構想をねつていたことをも容易に知りうるのである。

スマイスもバックル侯も、モレーの言う如く、余りフランス語が上手でなかつたためか彼らのフランスにおける生活はたいして楽しいものではなかつた、とも推察しうるが、それでもやはり十ヶ月間のパリ滞在はスマイスにとつて有意義であつたと言ひうるであらう。

以上の如く、スマイスは重農学派の人々すなわちフィジオクラアト・あるいはエコノミストと自ら称していたフランスの思想家達との関係が非常に親密の如く思われたので、スマイスは彼らからは同学の士とみなされていたようである。しかしながら、スマイスは、「ケネーを否認することを随分慎んでいたものだ。<sup>(5)</sup>……」と言われていることから、スマイスがケネーにたいしてはつきりと態度にこそあらわさなかつたけれども批判的であつた、ということ推察しうるのである。

さて、スマイスの大著『国富論』が世に出たのは一七七六年であるが、重農学派の創始者たるフランソワ・ケネーは一七七四年に死亡している。スマイスは、「もしケネーが生きていたなら

アダム・スミスの重農学派批判に関する一素描(田中)

七八

ば、『国富論』をケネーに献じたであらう。」という意志をもつていたと伝えられているが、その真偽のほどは判らないと言わねばなるまい。ともあれ、『国富論』においてスミスは重農学派批判を手厳しくなしているので、スミスを同学の士と信じていた重農学派の人々の失意は痛ましいものがあつたであらう。スミスの重農学派批判は、彼の『国富論』すなわち彼の経済学説を世におくり出し、そして重農学派の経済学説を過去の暗闇の中にはうむり去るには、その当時では充分な力をもつていた、と言いつるであらう。しかしながら、オンケン教授の述べる如く、「……スミスはすでにカーコーディの棲家からロンドンに移住し、そこでその著作『国富論』を指す一筆者註(1)に最後の手を入れていたのであるが、彼スミスは隣国(フランス)で起つてゐるこの出来事から全く何も学ばるところはなかつたであらうか?」<sup>(2)</sup>という疑問が起きるのである。

そこで、スミスと重農学派、とくにケネーとの学説上の関連について、あるいはまたスミスがなした重農学派批判について、若干の素描を進めるであらう。

註(1) “Oeuvres Economiques et Philosophiques de

François Quesnay”, Par Auguste Oncken”, 1888.

頁—XIII. フランソワ・ケネー著、島津亮二、菱山泉訳『ケネー全集』(第一巻)(有斐閣)昭和二十六年、七頁。

スミスとケネーとの関係がただ単に学問上のみでなく、スミスが医師としてのケネーに依頼した事実に関する記録—小泉信三著『アダム・スミス伝』(改造社)昭和七年、「スミスとケネー」の項、一三二—一三九頁参照。

(2) F. Quesnay, “Oeuvres” XIII. 島津、菱山訳(第一巻)、八頁。

(3) Gustave Schelle, “L’Economie Politique et Les Economistes,” 1914, p.117.

Cf., Henry de Jouvenel, “La Vie Oragense de Mirabeau”, 1928. — Chapter III, Un Entresol de Versailles, — pp. 19—31.

フランソワ・ケネー著、坂田太郎訳『ケネー』経済学表  
 以前の諸論稿—自由論—明証論—借地農論—  
 穀物論—人間論—租税論—金利に関する考  
 察—(春秋社)昭和二十七年、解説二頁。

(4) F. Quesnay, "Oeuvres", XIII. 島津、菱山訳(第一巻) / 八頁。

(5) 『チュルコー全集』の公刊にあたりて『富の形成と分配に関する省察』(Turgot, "Reflexions sur la Formation et la distribution des richesses," 1766.) にチュルコーがつけ加えた「アダム・スミスがチュルコーの理論と一致する点と一致せざる点とに関する観察」という文章の中の一章句。(F. Quesnay, "Oeuvres", XIII. 島津、菱山訳(第一巻) / 九頁。)

(6) Ibid. XIV. 同上 / 九頁

Dugard Stewart, "Account of the Life and Writings of Adam Smith", XIV.

J. K. Ingram, "A History of Political Economy", 1923, pp. 102—103.

(7) F. Quesnay, "Oeuvres", XIV. 島津、菱山訳(第一巻) / 一〇頁。

### 三、自然的秩序と自由放任論

(I)

アダム・スミスの重農学派批判に関する一素描(田中)

スミスが渡仏以前よりすでに経済的自由主義の思想を有していたことは今更いまでもないであろう。<sup>(1)</sup>

フランスのシャルル・リスト教授は、「少なくともある一点においては、スミスは彼ら(フィジオクラアト)により教えらるる必要はなかつた。すなわちそれは経済的自由主義の点である。彼はこの点については、すでに長く真摯なる主張者であつた。しかし彼の確信が、フィジオクラアトの熱烈なる信念との照合により、更に一層強められるに至つたことも疑うを得ない。」<sup>(2)</sup>と述べている。

また、スミスがハチソンから自然の秩序に関する思想を伝えられていたことも事実であるが、自然の秩序の論拠の上に立つて自由放任を唱えるということは、<sup>(3)</sup>はじめて重農学派より受け取つたものである、と言ひうるであらう。

註(1) 小泉信三教授は、「スミスの経済的自由主義思想はフィジオクラアトとの接触以前、いな、フィジオクラアトの著作以前にすでに発表されているので、スミスとフィジオクラアトとの自由主義思想の一致に関しては、ただちにスミスがフィジオクラアトにこれを学んだ、と即断してはならぬ。」と述べていられる。すな

アダム・スミスの重農学派批判に関する一素描(田中)

わち、ケネーの『借地農論』(“Fermiers”)は一七五六年に、『経済表』(“Tableau Economiques”)は一七五八年に、『自然権論』(“Le droit Naturel”)は一七六五年に発表あるいは印刷されている。しかしながら、スミスがすでに一七五〇—一七五一年にエディンバラにおいて試みた講義の報告がこのことを証明しているのである。(小泉信三著前掲書、二〇八—二〇九頁、二一五頁参照。)

(2) C. Gide et C. Rist, “Histoire des Doctrines Economiques”, 1922, p. 64. シイド、リスト著、宮川貞一郎訳『経済学説史上巻』(東京堂)昭和一六年、八一頁。

(3) 河合榮治郎前掲書、三二頁。

## (II)

ケネーもスミスも経済的自由主義(Laissez-faire)を主張する点では同じ意見をもっていた。しかしながら、ケネー及び重農学派においては自然的秩序(Ordre Naturel)は体系であり、しかも理想の制度であった。それ故、この秩序を達成させるために、「合法的専制制度(Despotism legal)<sup>(1)</sup>」を必要とした。

八〇

すなわち、ケネーは、経済社会の自己規制というものは攪乱を惹起する恐れがあるので、これを保護し維持するために啓蒙君主の存在を必要としたのである。

しかしながら、スミスにおいては自然的秩序は一つの事実であつた。スミスは、「ある種の純理論的の医者は、人体の健康を保つには食物と運動とについて一定の正確な養生法を守らねばならない、それに少しでも違反すると、その違反の程度に応じて、或程度の病気または不健康状態が必ず来ると考えるらしい。……ケネー氏は、彼自身医者であり、そしてすこぶる純理論的な医者であつた、……完全なる自由と完全なる正義とを享受しなければ、国民は、繁栄することができないと言ふのであるならば、世界中に今迄繁栄し得た国民はありえなかつた筈である。」<sup>(2)</sup>とケネーを批判した。

スミスは経済過程がもつ、自己回復力、自己規制力を楽観したのである。

すなわち、各人の自利心に放任するとき、私益と公益とがいわゆる「見えざる手」に導かれて、おのずから一致するといふ楽観主義、即ち経済上の自由主義を主張したのである。<sup>(3)</sup>

したがつて、国家行為を極度に抑え、「自然的自由主義より



言はば、元首の任務は、(一)、国防、(二)、司法、(三)、特定の公共土木事業の維持のみである。<sup>(4)</sup>」と国家行為を制限したのである。

ケネーは、自然的秩序を維持するためには原則として個人の自由放任を認めるが、それを維持し、保護するために、国家の行為—義務であつて干渉ではない—として、(一)、自然的秩序の維持—私有財産権の安全の維持ならびにその擁護の義務、(二)、教育の一般化、(三)、公共事業、(四)、国防の義務、を主張しているのである。<sup>(5)</sup>

以上のことから、ケネーは実はスミス自身よりも非常に高い程度で国家の干渉を排斥しており、「自然的秩序・自然権思想」の観点より経済的自由主義を主張していた、ということをも認めようのである。

すなわち、ケネーは国家の経済的行為を制限し、その収入面においてはこれを租税のみに認め、「租税が破壊的なものであつたり、国民の収入の総額に釣合わないものであつたりしないこと。租税の増加は、収入の増加に従つこと。それは直接土地の純生産物に対して賦課せらるべく、徴税費を倍加させ、商業を書し、且つ年々国民の富の一部分を破壊するおそれがあるため、人間の賃銀にも、生産物にも賦課されないこと。…」と主<sup>(6)</sup>

張したのであるが、これはスミスの「課税四原則」と同様の意義をもっていると言つらう。

註(1) Gide et Rist, *Ibid.*, p. 40 foot note. (2) 宮川訳、五二頁註。

(3) Adam Smith, "An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations", 1766, The

Modern Library ed, p. 638. マット・スミス著、大内

兵衛訳『国富論』第四編(岩波文庫第三分冊)昭和

二十九年、四五四—四五五頁参照。

(3) 花戸龍藏著『財政原理学説』(千倉書房)昭和三十一年、六二頁。

(4) A. Smith, "Wealth of Nations", Modern Library ed, p. 651. 大内訳(第三分冊)、四七六頁。

(5) Cf., Gide et Rist, *Ibid.*, P. 42. 宮川訳五四頁参照。

(6) F. Quesnay, "Maximes Générales du Gouvernement économique d'un royaume Agricole et notes sur ces maximes, Extrait du la Physiocratie, 1767—"Oeuvres", p. 332. ケネー『農業国の経済的統治の箴言、附箴言の註解』—フランソワ・ケネー著、

アダム・スミスの重農学派批判に関する一素描(田中)

坂田太郎訳『ケネーノ経済表』(春秋社)昭和三年、一六八頁。

(7) スミスの「課税四原則」——(一)、平等の原則——各個人はその収入に比例して納税すること、(二)、確実の原則、(三)、便宜の原則、(四)、徴税費節約の原則。

(Cf., A. Smith, "Wealth of Nations", Modern Library ed., pp. 777—778.)

#### 四、スミスの重農学派批判

スミスは『国富論』第四編第九章を「農業主義、即ち土地の生産物を以て各国の収入及び富の唯一のもしくは主たる源泉となす経済学説について」と題して、重農学派の学説にたいして批判的な態度を示している。この章の中でスミスは、「この学説は極めて不完全であるにかかわらず、経済学の問題についてこれまで発表されている真実に最も近づいたものである。」<sup>(1)</sup>と述べている。また、スミスはケネーを「この学説の独創的にして深遠な創始者」<sup>(2)</sup>と尊称し、フィジオクラアトを「博学にして才気喚発」と讃辞をあたえている。

リスト教授はこの章句を重視して、「スミスはフィジオクラ

八二

アトの学者達を尊敬を以てせずして語ることはなかつた。彼らより受けたる印象が強くて容易に消し難く、それがために根柢において彼自身の理論と衝突するものがあるうとも、彼らの思想のあるもののもつれを解くことは出来なかつたのである……<sup>(3)</sup>」と述べ、スミスがフィジオクラアトの影響から全く脱し切れなかつたために、スミスの学説が——とくに批判に関し——不徹底とならざるを得なかつた、とみなしている。

われわれは以上の観点を肯定しうるであらう。しかしながら、スミスが丁重の限りをつくしてその批判を蔽つた事実を認めるとしても、第九章の冒頭において、「土地の生産物を以て各国の収入及び富の唯一の源泉となすこの学説は、私の知れる限りではこれを採用した国はないのであつて、いまのところただフランスの博学創意の少数人々の思索の中に存するだけである。従来世界の如何なる部分にも、いまだ何らの害を及ぼしたことの無い、そしてまた将来もそのおそれの断じてあるまいと思われ、一つの学説の誤謬は、これを長々と検討する価値はたしかにあるまい。」<sup>(4)</sup>(傍点筆者)、と述べている章句とあわせ考えると、先に引用したスミスのフィジオクラアトにたいする尊敬の念がむしろ皮肉な感じさえ伴つてわれわれに響いてく

るのである。そのためかオンケン教授は、「フィジオクラアトに対するスミスの丁重な讃辞は駁論に力を与えるに役立つ。蓋しかくの如きすぐれた方法で述べておいて結局はこの原理をけなすようにすれば、その判決はそれだけに一層正しくなるに違いないからである。」と述べ、<sup>(5)</sup>「あたかもスミスがフィジオクラアトをほめておけばそれだけに彼ら<sup>(6)</sup>をけなす点において効果的であるということを意識していたかの如くにみなしている。

しかしながら、右の如きオンケン教授の見解は少しうがちすきているように思われる。

なぜならば、スミスは第九章の冒頭において重農学派を非難しており、中程でいわゆる「生産的労働と不生産的労働に関する批判」を行う、その後、「この学説の教えるところは、あらゆる点において正当であり且つまた寛大にして自由である。」<sup>(6)</sup>と述べているからである。

これを要するに、スミスは重農学派にたいしては批判的な態度をもつていたのであるが、彼らから影響を受はるといふもまた多かつたため彼自身の理論的態度がいまいにならざるを得なかつた、とみなす方がより妥当であらう。

註(一) A. Smith, "Wealth of Nations", Modern Library

アダム・スミスの重農学派批判に関する一素描(田中)

ed, p. 642. 大内訳(第三分冊)、四六一頁。

(2) Ibid., p. 637. 同上、四五二頁。

(3) Gide et Rist, Ibid., p. 73. 宮川訳九二頁。

(4) A. Smith, "Wealth of Nations", Modern Library ed, p. 627. 大内訳(第三分冊)、四三五頁。

(5) F. Quesnay, "Oeuvres", XIV. 島津、菱山訳(第一巻、九頁参照)。

ハイマン教授も、「スミスは彼と競争的な地位にたつフランスのフィジオクラアトを批判し、非難した。…スミスは競争相手の特徴とした方法を自分のものとして主張していたのである。」と述べている。

(Eduard Heilmann, "History of Economic Doctrines", 1945, p. 78. エドワード・ハイマン著、喜多村浩訳『経済学説史』八中央公論社、昭和二九年、一三三頁。)

(6) A. Smith, "Wealth of Nations", Modern Library ed, p. 642. 大内訳(第三分冊)四六一頁。

## 五、重農学派の学説の現実性とスミスの非難

アダム・スミスの重農学派批判に関する一素描(田中)

八四

スミスは重農学派の学説を、「私の知れる限りでは、これを採用した国はない。」<sup>(1)</sup>、また、「将来もそのおそれのない学説」<sup>(2)</sup>と称したが、これは少なくともスミスの誤謬である。スミスはかくの如く述べておきながら、同じく第九章の中で、「彼らの著作は、彼らの国にとつて相当な貢献をなし、従来十分に研究を尽してなかつた多くの問題を一般的の論議に上ぼせたのみならず、また、農業のためになるように政府の行政にある程度影響を及ぼしたのであつた。従つて、フランスの農業が、従来苦惱していた圧制の内のあるものから免れたのもまた彼らの説明のおかげであつた。」<sup>(3)</sup>と述べ、フランスの土地契約期間の改善をその良い例としてあげている。すなわち、スミスは重農学派の学説を、「害を及ぼすことのない学説」<sup>(4)</sup>と一蹴しておきながら、「この学説は相当な貢献をなしている」ことを認めているのである。この点に關しても、スミスの重農学派観がいかに不徹底であり、矛盾に近いものであるかということを感じないではいられないのである。<sup>(5)</sup>

さて、スミスは、重農学派ことにケネーの学説を誤解乃至は不十分に理解していたのであるが、スミスのこの不徹底は、彼がケネーの「土地にたいする直接単一税の理論」に關して触れ

ていないことから容易に知りうるのである。

オンケン教授は、「スミスの批判全体がいかに輕卒になされたものであるかということは、彼がケネーの学説の説明にあつて『土地単一税』論を等閑にしたという事実から明らかに了解されるのである。」<sup>(6)</sup>と述べているが、この章句はスミスの重農学派理解の不徹底を端的に表現したものであると言ひうであらう。

事實、ケネーの学説は、現実化されているのである。

すなわち、第一に、スミスの『国富論』が公刊される二年前——一七七四年(ケネー死亡の年)にチュルギーが大臣に任ぜられていたのである。<sup>(7)</sup>

第二に、ケネーの計算した課稅率は、ネッケルの計算による予算(一七八一年度革命政府予算)とほぼ同一の六億一千万フランであつたということである。<sup>(8)</sup>

第三に、バーデン辺境伯フリードリヒ(Markgraf Von Baden)が「直接単一税」を彼の領土において採用したと云ふことである。

フリードリヒは典型的な啓蒙君主であり、重農学派の信奉者であつたが、一七六九年より彼の領土内の三行政区(Con-

mmes) において「直接単一税」の実験にとりかかっている。この実験によつて、三行政区の内、二区が四年後に放棄せざるを得なかつたが(1772—1776)、残りの一区は不成績ながらも一八〇二年まで継続されている。<sup>(9)</sup>

第四に、フランス革命当時の憲法議会は、ケネー及びフィジオクラートの思想の影響を受け、歳出を五億に制限し、その半分の二億四千万フランを土地からの純生産物に仰いでいるのである。<sup>(10)</sup>

これを要するに、重農学派の学説は現実化されているのであつて、スミスの非難は誤謬であると言わねばなるまい。

また、たとえ重農学派の学説がスミスの言う如く、「単に少数のフランス人達の思索の中のみ」<sup>(11)</sup>に存していたとしても、スミスの批判は当を得ていないと言わねばなるまい。

オンケン教授も述べる如く、「まことにプラトンの政治論は、かつて適用されもしなかつたし、将来も恐らく適用されることは決してないであろう。しかしながら、その学問上の存在理由は決して否認されていない」<sup>(12)</sup>のである。

ケネーの学説及び研究態度は、従来においてみられたような単なる個々の経済現象や経済問題の孤立的な説明や、政策論を

脱したところの社会的に結合した人間の経済活動及びこれに伴う経済現象や経済組織を体系的に説明しようとしたものであつて、それは科学的である、と言ひうるであらう。

換言すれば、ケネー及び重農学派の学説のもつ科学的価値を卒直に認めなければならないことは今更ここに言うまでもない。

註(1) A. Smith, "Wealth of Nations", Modern Library ed, p. 627. 大内訳(第三分冊) 四三五頁。

(2) Ibid., p. 627. 同上、四三五頁。

(3) Ibid., pp. 642—643. 同上、四六二頁。

(4) Ibid., p. 627. 同上、四三五頁。

(5) スミスの重農学派観が矛盾に近いものである、ということについては、内田義彦教授も述べていられるが、内田教授は、スミス自身の矛盾した表現を手がかりとして、その背後にひそむスミスの一貫した立場を発見しようという、積極的な研究態度を示されている。(内田義彦著『経済学の生誕』八未來社、一九五四年、二八九—二九二頁参照。)

(9) F. Quesnay, "Oeuvres", XVII. 島津、泰山訳(第一

アダム・スミスの重農学派批判に関する一素描(田中)

八六

巻)、一四頁。

(7) チュルゴーは一七七四年七月二〇日附海軍大臣に任ぜられ、植民地の奴隷廃止その他の政策を準備してゐたが僅か五週間後に大蔵大臣に転じた。

(チュルゴー著、永田清訳『富に関する省察』入岩波文庫▽昭和二九年、解題七頁参照。)

チュルゴーの大蔵大臣就任についての島恭彦教授の論述を借りれば、「まことに重農学派経済学の最後の巨頭であるチュルゴーが政界に乗り出したと言ふことは、フランス革命前史における最もドラマチックな瞬間であつた。」のである。(島恭彦著『近世租税思想史』入有斐閣▽昭和三年、三二〇頁参照。)

(8) Gide et Rist *Ibid.*, p.45. Foot note (1). 宮川訳、五七頁註3。

(9) *Ibid.*, p. 50. 同上、六四頁参照。

なおドミンヌの Hildebrand の "Jahrbücher", 1872. Vol. II, p. I. Emminghaus は、ひつと与えられた説明、および "Éphémérides" 1771, Vols. IV—VII, を参照してゐるが、それによれば、フリードリッヒの「直接

単一税」の実験は、一七七〇年にはじまり、一七九二年まで継続されたことになつてゐる。(Cf., H. Higgs,

"The Physiocrats, Six Lectures on the French Economistes of the 18th Century", 1892. p. 86.

Higgs 著、住谷一彦訳『重農学派』入未来社▽一九五七年一一八—一九頁参照。)

(10) Gide et Rist, *Ibid.*, p. 51. 宮川訳、六五頁。

重農主義学説のフランス革命に対する積極的な影響—マルクスも認めてゐる如く(『反テューリング論』)「われわれも、これを肯定せねばならぬであらう。

(Cf., Pierre Mendès France et Gabriel Ardat.

"La Science économique et l'action", 1954, p. 8.

マンデス・フランス、ガブリエル・アルタン共著『経済学と経済政策』入日本経済新聞社▽昭和三年、二—三頁。

横山正彦著『重農主義分析』入岩波書店▽昭和三三年、二〇三頁。)

(11) A. Smith, "Wealth of nations", Modern Library ed., p. 627.

(12) F. Quesnay, "Oeuvres", xv. 島津、菱山訳(第一卷)、一〇—一一頁。

オンケン教授は同箇所でまたつぎの如く述べる。すなわち、「スミスは自己固有の原理に近いケネーの学説に不利なる地位を与える方が自分のためになると思つたので、このような修正(重農学派批判の修正)をしなかつた。」

## 六、「生産的労働」と「不生産的労働」

とに關するスミスの重農学派批判

(I)

スミスの重農学派にたいする批判の主要なるものは、重農学派が農業を生産的産業として、商・工業を不生産的産業としたことに關してなされたものであるが、これは一般的に言われている如くスミスの誤解によるものである。そのためスミスの重農学派乃至批判が不徹底なものとなつていたのである。

この問題に關してケネーの述べている「富の概念」という根本的問題と関連せしめて素描してみよう。

アダム・スミスの重農学派批判に關する一素描(田中)

ケネーは、「富」に關しては先づ「財」から述べている。すなわち、ケネーは財を無償財(biens gratuits)と有償財(biens commerciable)との二つに分けてゐる。ケネーは、「(売上)価値あつての収入である。」われわれは国内において、使用価値を有して、売上価値を有していない財を、使用価値と売上価値とを有している富と区別しなければならぬ。」と述べている。すなわち、前者は使用価値のみを有し(無償財)、後者は使用価値と売上価値の両者を併有する財(有償財)であつて、これこそがケネーの言う「富」である。

ケネーは富を金銭的(貨幣)富(richeesse pecuniaire)と眞実の富(veritable richeesse, richeesse reele)とにわけてゐる。前者については、「それは商業において、實際の富の価値を表わすところの国内における補助的なまたは仮りの且つ流通する富の基本であるにすぎない。それらは、それ自身では、再生産される富ではない。貨幣は、人間の需要を充すことができぬし、また貨幣は毫も貨幣を産むことがない。實際の富がなければ金銭的富は不妊の且つ無用の富であらう……。」<sup>(2)</sup>と述べ、實際の富に結びつかない場合、「金銭的富は……農業、水運業、

対外商業、手工業の加工品並びに主権者の収入を犠牲にして形成される。」と述べているが、これはケネーが重商主義的思想に反対しているものである。

スミスは以上のケネーの学説を認めて、「国民の富は貨幣という消費し得ない富ではなくて、年々に再生産されるところの消費財 (the consumable goods) であるとしたこと……この学説は正当である。」と述べている。

しかしながら、スミスはケネーの「富」に関する観念を誤解している。そこでもう少しケネーの「富」の理論について閑説しよう。

ケネーの説く真実の富とはいかなる意味内容を持つているかと言うに、それは自然をしてその生産性を發揮させる前提となる富であつて、「それを享受し、安樂を得、且つ生活の需要を満足するための、常に再生し、常に欲求され且つ常に支払われる富」<sup>(5)</sup>であり、この富こそが国家を維持するのである。しからばこの富の再生産はいかにして行われるかというに、富の源泉については、ケネーが、「土地は富の唯一の源泉であり、富を倍加するのは農業である。」と述べている如く、農業(土地)である。

スミスはこの点を狭く解釈したのであろう。重農学派の学説を、「農業主義、即ち、土地の生産物を以て各国の収入及び富の唯一のもしくは主たる源泉となす経済学説」<sup>(7)</sup>と定義したのである。そして「国富論」の開巻において、「すべての国民の年々の労働は……その生産物を以て他国民から購入したものである。」、すなわち、労働こそが富の真実の源泉である、と述べてその出发点より重農学派の理論と全く反対の態度を示そうとしたのであるが、この有名な章句が後に多くの誤解をまねく余地があつたのである。

なるほどケネー及び重農学派の人々は何時も土地ならびに広義の農業を国家の繁栄と富の源泉とみなしたけれども、スミスの言う如くこれらを土地の生産物と同一視することは決してしていないのである。

ケネーの言う富は具体的には、土地に資本(金銭的富)を投下せしめ、農業に投下せられる労働力とによつて再生産ならしめられるのである。さて、この種の富(真実の富)は「農業の富」と「工業の富」等であるが、ケネーは、前者を「生産的な富」、後者を「不生産的な富」と称したのである。すなわち、農業のみが「純生産物 (product-net)」を産むのでこれを「生



産的な富」と称したのである。

ケネーのこの新しい「純生産物」なる概念は、彼が「国民の収入を構成する年々の富は、一切の支出を回収して、ひとが土地から引き出すところの利潤を形造るところの生産物である。」と定義している如く、それは一切の支出（年々の投下資本）を回収してなおそれ以上に残りうる部分を指すのであつて、これは農業においてのみ可能である。それ故に、農業を「生産的」と言い、その他を「不生産的」と称したのである。ただし、ケネーにおいて理解される「工業の富」は「手工業」による加工品であつて、それらは、もっぱら農業の収入の富によつて獲得され、それ自身では土地の収入によつてのみ更新されうる不姓の富にすぎないからである。

ケネーの言う「富」とはおよそつぎの如く書き示しうる。

無償財 (biens gratuits)	——	使用価値
有償財 (biens commerciables)	——	使用価値
		売上価値

具体的には、土地に資本（金銭的富）を投下せしめ、農業に投下せられる労働力によつて再生産ならしめられるもの。——

農業の富（「純生産物」を産む）——「生産的な富」

工業の富（手工業による加工品）——「不生産的な富」

アダム・スミスの重農学派批判に関する一素描（田中）

さて、スミスの非難は実に「生産的」、「不生産的」という用語に關してなされたのである。

すなわち、スミスは、「二人しか子供を産まない結婚は、両親の死を補うだけであつて、人口増殖に何ら寄与するところはない。しかしながら、三人以上の子供を持つ両親のみが子供を産んだと言ひ、二人を産んだ親は不姓であると言ひうるであらうか。商・工業者はたとえ剰余を生ぜないと仮定しても、生産しないと云えないではないか。」と非難したのである。<sup>(10)</sup>

これは明らかにスミスの誤謬である。ただし、ケネーにおいては、価値の附加（商・工業）と価値の増加（農業）とは質的に異なる意味を有するのであつてケネーは単に生産費を補う場合と価値の増加すなわち生産が生産費以上に剰余の部分を生み出す場合とは性質が異なるものと解している。生産的、不生産的というのは、富を産むや否やの問題ではなく、剰余の部分すなわち「純生産物」を生じるか否かの問題である。したがつて、「不生産的」と言う名を冠せられたからといつてそれはスミスの言う如く、「農業のみを尊敬して生産的と特別に」稱し、「商・工業者階級を不姓のあるいは不生産的階級という屈辱的名称によつてその地位を貶せようとした」<sup>(11)</sup>のでは決してない

アダム・スミスの重農学派批判に関する一素描（田中）

九〇

のである。

換言すれば、ケネーは、スミスの言う如く「農業のみを高く評価し、商・工業を余りにも低く評価しすぎた」のでは決しなかつたのである。すなわち、スミスの批判は、ケネー乃至フイジオクラートの「想定」または理論的実質にたいする批判ではなくて、単に「生産的」と言う言葉の「重農主義的用法」にたいする批判であるにすぎない。換言すれば、フイジオクラートの生産的労働論にたいする批判的見解に関する限り、スミスは、批判されるべき学説の理論的実質に依存しつつこの学派の概念想定に対立しているのである。<sup>(12)</sup>

以上の如きスミスの「意外な非難」<sup>(13)</sup>は明らかにスミスが「も」の区別をしたのではなく、「用語」の区別をしているにすぎないのである。

スミスが幾度もくり返している「不生産的、不妊的な屈辱的表現」に関しては、スミスが非難する以前にすでに問題となっていたのである。スミスがパリで重農学派の人々と共に暮らしていた時代に、この学派の人々はすでにこの争論の渦中にあつたのである。三生産階級すなわち、農・工・商業に同時に適用された生産的という特色づけは、スミス唯一人でうちたてられ

たのでは決していない。それとは反対にこれはすでにケネーに對立するマーカンテイリスム学説の擁護者によつて熱烈に修正を要求されたものである。<sup>(14)</sup>そしてスミスはパリ滞在中いろいろの事件に遭遇しているが、これら数多くの大小の事件に関してケネーは諸論文を「農・商・財政評論」(“Journal de l'agriculture, du commerce et des finances” 1766.) にすでに発表しているのである。<sup>(15)</sup>

その中でも、『商工業の生産性』<sup>(16)</sup>に関するH氏のN氏に對する駁論について、執筆者各位に對するN氏の書翰（一七六六年六月）のむすびの箇所において、「われわれが商業をば単に不妊的であるといつただけのことを把えて批難したまうな……」<sup>(16)</sup>と述べているが、このケネーの章句はまさにスミスにたいしてそのままではまると言ひうるであらう。

さて、スミスは商工業を除く少なくとも官吏、僧侶、医師、芸術家等の如き知的労働者を「不生産」と稱しているが、彼はこれらの階級を軽視したのでは決してないであらう。それと同様に、ケネーの「不生産的、不妊的」という用語も何らさげすみの意味をもつていないのである。ケネーの論述と根本的に関連せしめて考察するとき、スミスの以上の如き批判の内容は甚

だ不統一であり、不徹底であるが、このことに關してつきの如く推測しうるのである。

すなわち、「スミスは、彼が攻撃しようとした重農学派の学説そのものによつて強く影響され、半はこれを是認したために、剰余価値を生産する労働のみを生産的労働とするという彼の最初の態度を、最後迄維持することができなかつたのであらう。もしも彼が商工業に従事する労働者もまた、農業に従事する労働者と同じく、剰余価値を生産すべきことを原則的に理解していたならば、このように態度を二重にする必要を感じなかつたであらう。このように考えると、生産的労働と不生産的労働との区別の標準を、単に富の生産という点におく—その場合には、農業のように附加生産物の存在を明瞭に指摘し得るときにのみ、剰余のことが意識される—のと、これを価値の生産という点におくとは、著しく異なつた結果を招来するものなる<sup>(5)</sup>ことが、理解されるであらう。」

註(1) F. Quesnay, Maximes, "Oeuvres", p. 353.

ケネー『箴言』—坂田訳『ケネー』経済表』—二〇六頁。

(2) F. Quesnay, Impôts (Economie Politique) Par

アダム・スミスの重農学派批判に關する一素描(田中)

Quesnay, Article inédit, avec notes de Turgot, 1757, — "François Quesnay et La Physiocratie",

II, 1958, p. 584. ケネー『租税論』—坂田訳『ケネー』経済表』以前の諸論稿』—三五七頁。

(3) Ibid., 同上, 三五二頁。

(4) A. Smith, "Wealth of Nations", Modern Library ed., p. 642. 大内訳(第三分冊) 四六一頁参照。

(5) F. Quesnay, Grains (Economie Politique), article de M. Quesnay le fils, Extrait de l'Encyclopédie, 1757, — "Oeuvres", p. 239. ケネー『穀物論』—坂田訳『ケネー』経済表』以前の諸論稿』—二二二頁。

(6) F. Quesnay, Maximes, "Oeuvres", p. 331. ケネー『箴言』—坂田訳『ケネー』経済表』—一六七頁参照。

(7) A. Smith, "Wealth of Nations", Modern Library ed., p. 627. 大内訳(第三分冊) 四三五頁。

(8) Ibid., VIII, 大内訳 第一編(第一分冊) 一五頁。

(9) F. Quesnay, Impôts, "François Quesnay et La Physiocratie", II, p. 582. ケネー『租税論』—坂田訳『ケネー』経済表』以前の諸論稿』—三五四頁。

アダム・スミスの重農学派批判に関する一素描(田中)

九二

- (10) A. Smith, "Wealth of Nations", Modern Library ed, p. 639. 大内訳(第三分冊)・四五五―四五六頁参照。

- (11) Ibid., 同上, 四三七―四三八頁。

- (12) 平田清明「ケネーとスミス」―『国富論』第四編における「農業主義をめぐって」(高島善哉編集『スミス国富論講義四』入春秋社、昭和二十六年、一三五頁。)

- (13) Cf., F. Quesnay, "Oeuvres", xvii. 島津、菱山訳(第一巻)・一三頁参照。

- (14) Ibid., xvi. 同上, 一二頁。

オンケン教授は、「フィジオクラートの著作にして、生産的なる表現はある屈辱的な述べ方だという非難を反駁しなかつたようなものは発見し難いであろう」と述べて、ケネー自身の章句を引用している。――「このような形容は何ら不快さを有しない。商業よりも高尚な職業でさえも、かかる形容を甘んじて受けとる多くのものがある。司祭職・裁判官・軍人は有益な役割をはたすが、その機能に関しては不妊の階級に属

してゐる……物的な区別は何ら品位に影響しなかつて人間の自尊心には殆ど無関係でなければならぬ云々。」(Ibid., xvi. 同上, 一一頁。)

- (15) Cf., Ibid., xvi. 同上, 一二頁参照。

- (16) Cf., F. Quesnay, Lettre de M.N. Auteurs, etc., au Sujet de l'objection qui lui a été faite par M.H. relativement à l' Industrie, Juin, 1766, "Oeuvres", p.445, p.493. ケネー『入商工業の生産性』に、関するH.氏のN氏に対する駁論について、執筆者各位に対するN氏の書翰(一七六六年六月)―島津、菱山訳(第三巻)一七七頁。二五〇頁参照。

- (17) 堀経夫著前掲書、一〇八頁。

(II)

以上において、スミスの重農学派観乃至批判の一面性が彼の誤解と不徹底とによるものであるとみて来た。しかしながら、このことは必ずしもすべてがスミスの誤解と不徹底とによるものであることをば決して意味しない。スミスは重農主義をフランスの重商主義すなわちコルベルティズムに対立せしめて、「諺にいう曲げすぎた竿は、反対に同じ位曲げねばならない」と。農業は

各国の収入及び富の唯一の源泉であるという学説(システム)を提唱するフランスの思想家は、この諺の公理を採用したように見える。すなわちコルベール氏の方策は都会の産業を農村のそれに比してたしかにあまりにも高く評価しすぎていたが、かれらの学説は、たしかにまたあまりそれを低く評価しすぎているかと思われる。」<sup>(1)</sup>と述べている。しかしながら、スミスは重農主義を単にコルベルティズムにたいする反動としてのみとらえていたのでは決してない。内田義彦教授が述べられる如く、「……保護―独占の体系としての、かつ理論的には富の増殖を流通において把握したにすぎない重商主義の政策、及び理論にたいする、根源的な批判の意味をスミスはケネーにおいてみた。ただそれが反動的に農業に固定化してとらえられているものとみてそれをあやまれる固定から解放しようとする。」<sup>(2)</sup>のである。

また、「生産的労働」、「不生産的労働」に関するスミスの批判が、「重農学派的用語」にむけられてなされるかぎりそれはスミスの誤解であるとしても、スミスが「工業」における「生産性」を見出そうとしたことは、ケネー及び重農学派が「純生産物」を生み出す階級すなわち「生産階級」を「農業」のみにしか見出せなかつた「古拙」<sup>(3)</sup>に比して、たしかに一段

アダム・スミスの重農学派批判に関する一素描(田中)

階進んでいると言わねばなるまい。

すなわち、重農学派は「農業」のみを生産的である(農業資本主義)として、自然法観の立場より社会の発展を非連続的かつ絶対的であるとなし、「工業」の発展(産業資本主義)を見出すまでに至らなかつた。これにたいしてスミスは、自然法が実現されなくてもある程度社会は発展しうるし、さらにその発展のなかで、自然法の実現が歴史的に用意されるにいたるという見解をとつて、<sup>(4)</sup>産業資本主義の発展を正しくみている。(傍点筆者)

ケネー及び重農学派が農業資本主義を絶対的なものとして、それ以上進歩しなかつたのにたいして、スミスはそれをより一層進めて産業資本主義の発展の事実を見つめていたのである。この点に関しては、たしかにケネー及び重農学派の思想・学説はそれだけ遅れ、スミスの思想・学説はそれだけ進んでいた、と言いうるのである。

では、何故重農学派の思想・学説が、ほとんどそれと同時代であるにかかわらず、スミスの思想・学説が遅れていたのか。否、遅れねばならなかつたのか。換言すれば、重農学派の「遅れ」(すなわち農業資本主義の立場のみに目をうばわれていた

アダム・スミスの重農学派批判に関する一素描(田中)

九四

こと)がやがてこの学派の崩壊の主要因をなすに至り、またスミスの批判の対象ともなつたのであるが、そういった原因をいかなる点に求めればよいであろうか。

それは、フランスという国家、社会の構造の特殊性に求めねばならないであろう。

すなわち、第一に、フランスは農業、土地を疲弊せしめた封建領主制度の残滓がまだ存在していたのである(アンジャン・レジーム末期)。第二に、スミス自身も認めている如く、コルベルティズムの弊害が甚だしかつた。そして、第三に、フランスにおいては当時の主要産業はいまだなお農業であつて、工業は手工業の域を越えず、そのため国家の経済上の建て直し及びその発展は、農業、具体的には大農経営によらねばならなかつたこと、等である。<sup>(6)</sup>

ケネー及び重農学派の人々には当然「農業」のみが目に見えた。それ故、彼らの思想・学説も必然的にいちじるしく「農業」に制約されざるをえなかつたのである。けだし、理論乃至学説の存在は、すくなくとも経験科学に關しては、事実の存在を前提とする<sup>(6)</sup>からである。したがつて、重農学派が一貫して、農業における資本主義的生産様式の優越性を明らかにする

ことにもつとも力をそそぎ、<sup>(7)</sup>そして彼らが工業の生産性を認めるに至らなかつたことも、まさにこの点にあつたのである。

換言すれば、工業の生産性についてのより進んだ認識と分析は、「本来農業の優越な国であつたフランスにおいてではなく、十八世紀の初頭以来、次第に、近代資本主義の先進国としての地位を確立しつつあつたイギリスにおいてはたされなければならなかつた<sup>(8)</sup>」のである。

また、このことに関してジイド教授の論述を思いおこしう。すなわち、ジイド教授は、「フィジオクラアティの意味における純生産物は畢竟一つの錯覚にすぎまい。それは、物質の創造において見出されるのでなく、また価値の創造において見出されるでもない<sup>(9)</sup>」、「しかし、人もしフィジオクラアトを生める時代の環境を想見するとき、この錯覚は容易に説明しうるのである<sup>(10)</sup>。」と述べている。そして、「しかし、かれらの時代に、現在の如く配当により気位高く生活している株主の一階級が存在しておつたとすれば、疑いもなくフィジオクラアトは、製造工業の内にも、純生産物が存在するという結論に達したであろう<sup>(11)</sup>。」「かれらが、しかし今日生存していたならば、農業保護論者たりえたであろうかは疑わしいのである。こ

れが、かれらの思想をもつともよく研究した経済学者オンケン  
の意見である。」<sup>(12)</sup>と述べて、重農学派の思想・学説がいかに当  
時のフランスの歴史的、社会的背景に制約されていたかという  
ことをオンケン教授とともに重視している。

これを要するに、先に引用した如く、「理論乃至学説の存在  
は、すくなくとも経験科学に関しては、事実の存在を前提とす  
る」ものであるという鉄則をスマイスが理解していたならば、す  
なわち、スマイスが経済の発展に関してはフランスがイギリスに  
比して遅れていたということの本質的に理解していたならば、  
彼の重農学派観もおそらくもう少し同情的であつたであろう。

スマイスはケネー及び重農学派の思想・学説が歴史的、あるいは  
社会的要求にもとづくものであるとして、彼らの思想を現実  
的に裏づけようとしているのであるが、この点においてもスマ  
イスはフランスという国家・社会の実状を本質的に理解していな  
かつたため、彼の重農学派批判は不充分に終つていたのである  
註(一) A. Smith, "Wealth of nations", Modern Library

ed, p. 628. 大内訳(第三分冊)、四三七頁。

(2) 内田義彦著前掲書、二九九頁。三〇四頁。

(3) 内田教授は、「……このケネーの純生産物の理論に

アダム・スマイスの重農学派批判に関する一素描(田中)

は剰余価値の発生を生産過程そのものにみとめたケネ  
ーの天才と、未だ使用価値的観点にとらわれ、剰余価  
値の成立を農業においてのみ見たケネーの古拙がよこ  
たわつてゐる……。」と述べていられる。(傍点筆者)

(内田義彦著前掲書、三〇八頁。)

(4) 同上、三〇〇頁、註1参照。

(5) Cf., Henri Woog "The Tableau Economique of  
François Quesnay—An Essay in the Explanation  
of its Mechanism and a Capital Review of the  
Interpretation of Marx, Bilimovic and Oncken—",  
1950. 中 "Socio—Historical Background", pp. 11  
—14.

フランスにおいては、ビッグスやウーグが述べる如  
く、ルイ王朝(ことに太陽王ルイ十四世の時代)によ  
る濫費も甚だしかつたが(Cf., H. Higgs, *Ibid.*, p. 5,  
及び H. Woog, *Ibid.*, p. 11.)、戦争による被害もまた  
甚大であつた。すなわち、島国であるイギリスは戦争  
による被害が艦船のみで済むに比して大陸国であるフ  
ランスは直接、土地—農業を破壊され、また資本蓄積

アダム・スミスの重農学派批判に関する一素描(田中)

九六

の程度も遅らせられた。それ故、産業革命の点においてもフランスはイギリスに遅れ、したがって、商・工業における価値発生の過程は注目に値するほど発展していなかった。また農業経営もフランスにおいては分益小作農(Metayage)が多かった。

(6) 横山正彦著前掲書、一八六頁。

(7) 同上、一八四頁。

(8) 同上、一八六頁。

『ケネーにおける八国富Vの見解について』研究されている渡辺輝雄教授は、「ケネー或はフィジオクラートとアダム・スミスとの間の富およびその源泉に関する把握の相違は、……実は、彼等の立っていた社会的立場の相違、産業資本の相違から来ていた。」と述べられる。すなわち、「ケネー或はフィジオクラートは当時のフランスの特殊事情の下において農業資本の立場に立つて資本主義を観ていた。これに反して、アダム・スミスは、英国における当時の資本主義の発展の実状に應じて、単に農業部面における産業資本のみならず、工業部面における産業資本の立場に立つて資本

主義経済を観察していたのである。……」と述べられ、「……この点は、ケネー或はフィジオクラートの経済学と、アダム・スミスの経済学との異同を問題にする際には特に留意しなければならない。……」と強調されている。

(渡辺輝雄『ケネーにおける八国富Vの見解について』) — 「東京経大会誌」第拾八号八昭和三十二年十月V——六三—六四頁参照。) —

(9) Gide et Rist, *Ibid.*, p. 18. 宮川訳、二三頁。

(10) *Ibid.*, p. 18. 同上、二三頁。

(11) *Ibid.*, p. 18. 同上、二四頁。

(12) *Ibid.*, p. 20. 同上、二五頁。

七、むすび

以上において、スミスと重農学派、とくにケネーとの学説上の関連を若干素描し、そして後にスミスの重農学派批判について関説した。しかしながら、スミスが重農学派よりいかなる点を学びとり、いかなる点に關しては批判的であつたか、そしてスミスの学説がケネー及び重農学派の学説に比していかほど進



歩していたかということについては、スミスの学説はもとより重農学派の側からも一層の研究をせねばならないであろう。

ところで、国家の経済干渉（重商主義）を排斥して経済的自由主義を唱える学説—この場合、ケネーの学説とスミスの学説を意味する—は、たとえそれらの学説が直接相互間に関連性になかったとしても大体同じ傾向の意味内容を有しているということ<sup>(1)</sup>を認めねばならない。しかしながら、これらの学説が本質的に異なっている点を求めようとするならばそれはやはり社会的背景すなわち国家情勢の相違点（フランスとイギリスの国家、社会構造の相違）に求めねばならない。

事実、重農学派の学説は余りにも一方に偏していたということとは認めうる。しかしながら、立場の相違から来るところの外在的批判をもつて、アダム・スミスの如くこれを一蹴するのは学問的態度ではない、<sup>(1)</sup>と言わねばなるまい。すなわち、同じ立場にあつて学説の論理的構造を吟味する内在的批判こそが必要なのである。<sup>(2)</sup> スミスの重農学派の理解の程度は不徹底であつた。したがつて、スミスの重農学派批判は必ずしも当を得ているとは認めがたい。

オンケン教授も述べている如く、「ケネーの分類の方法がアダム・スミスの重農学派批判に関する一素描（田中）

ミスのそれよりすぐれているかどうか—同じ根拠に立つて—を知ろうとする問題は現在でもやはり論争に傾きやすい<sup>(3)</sup>であろう。

また、ハイマン教授は、「ケネーについては、彼が独りで財の循環の理論を創出したということは、本当の意味で言っている。しかしスミスは、既に長く続いた実り多き伝統をうけついたのであつた。」<sup>(4)</sup>と述べているが、この論述は妥当とみなしうる。ケネーは財の循環が如何に、*(how)* 行われるかということ<sup>(5)</sup>を述べようとしたのであるが、他方スミスは何故に、*(why)* 財の循環が行われるかということを説明しようとしたのである。すなわち、ケネーは自動メカニズムを敘述したのであるが、スミスはそれを説明したのである。しかしながら、説明とすることは決して単なる敘述の模倣ではないのである。

スミスは先人の思想や学説を集大成した。すなわち、スミスは先人の思想や学説を模倣したのではなく、「これに化学的作用を施して全く新しき生産物（学説）を完成したのである。」<sup>(6)</sup>

上述の如き意味において、われわれはケネー及び重農学派をスミスの偉大な先駆者と認めるとともに、スミスにおいてはじめて経済学が独立の科学として成立したと認めうるのである。

る。

- 註(1) 山口正太郎著『重農学派経済学』(同文館)昭和六年,三一九頁。
- (2) 同上,三一九頁。
- (3) F. Quesnay, "Oeuvres", xvii. 島津(菱山訳(第一卷))、一三頁。
- (4) E. Heilmann, *Ibid.*, p. 63. 喜多社訳、一〇三頁。
- (5) Cf., *Ibid.*, p. 79. 同社、一二五頁参照。
- (6) 河合栄治郎前掲書、三四頁参照。